

「土製聖人像」にまつわる話

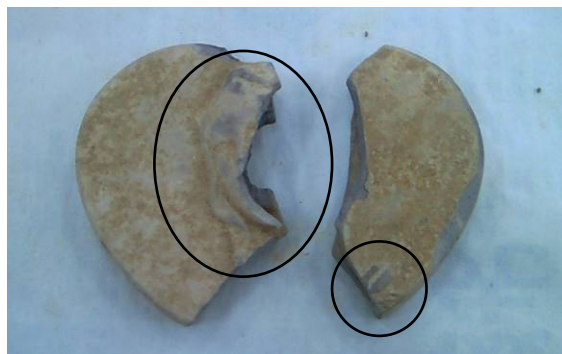
～「塩見城跡（日向市）」発掘調査～

「塩見城跡（日向市）」は、東九州自動車道（門川～日向間）建設に伴って平成17年度から19年度にかけて宮崎県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施しました。私は調査担当の一人としてこの発掘調査に参加しました。

現在、開催中の当館と大分県立埋蔵文化財センターとの合同企画展「豊と日向～日出る国の考古学～」で展示中の「土製聖人像」が発見されたのは、塩見城跡南側曲輪群の道路状遺構上部の造成土中（左下写真）からでした。発見当時は土が付着し、瓦質の土製品としか認識できず、お菓子の「カントリーマアム」のようだと調査員同士で話していたことを覚えています。



【発掘調査時の様子】
※白丸が発見箇所



【水洗後乾燥中の土製品】

その後、整理作業中、この謎の土製品を洗ったのち、自然乾燥させているときに表面に何かの図像があることが判明しました。右上の写真をよく見てください。中央部分に女性の顔、右下には葉っぱのような図像があります。この図像は、いろいろと調査をしたところ「マリア十五玄義図」等に同様なものが認められることが分かりました。聖母マリアがキリストを抱き、手にバラ（橘）を持つ聖母像であると解釈され、キリシタン関連遺物と判断しました。

「土製聖人像」が発見された造成面から出土した遺物（約130点）は陶磁器類で、その内訳は重量比で中世（92%）、近世（7%）、近代（1%）とほとんどが中世のもので、その時期は14世紀前葉～17世紀初頭であり、土製聖人像も“中世から近世前半のもの”と推測されます。

また、図像の原型と考えられる「セビリアの聖母」の模刻である「マリア十五玄義図」の作画年代や日本へのキリスト教布教の観点から、少なくとも“16世紀後半以降”と考えられます。

塩見城の位置する日向市には貿易港である細島港があり、日向国の港町にはキリシタンが存在していたことも分かっているため、中世に交易や信者を介して持ち込まれた可能性は低くはないといえます。また、豊後国の戦国大名である大友宗麟は、日向侵攻（1578年）の際に、日向国をキリスト教国にする意図で宣教師を伴っていたことからキリシタン関連遺物がもたらされる環境にあったといえます。

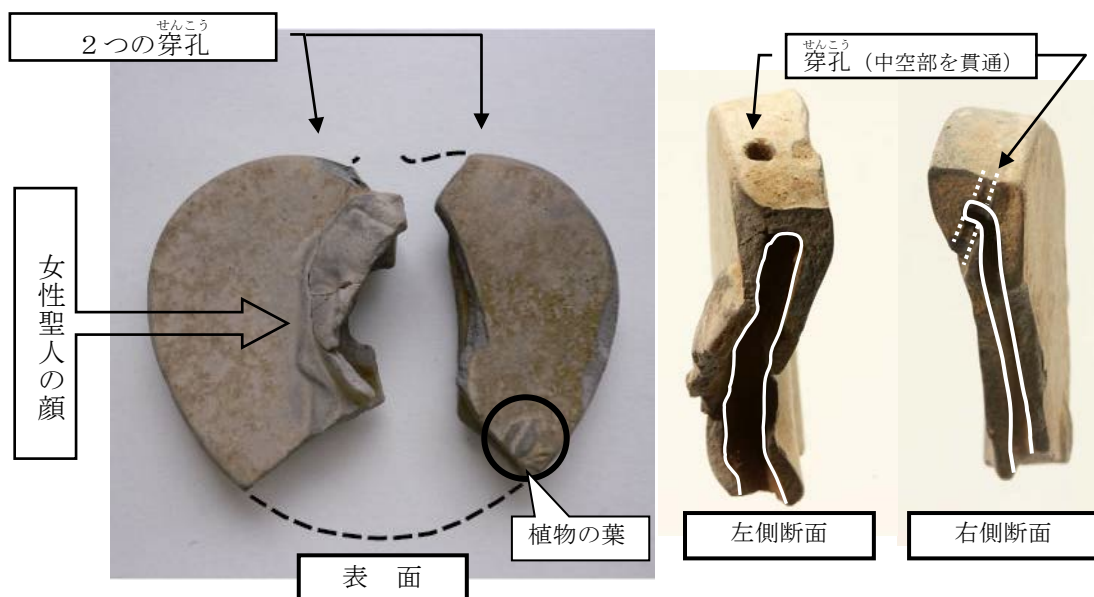
一方、禁教令（1614年）以降のいわゆる「隠れキリシタン」が所有していた可能性も考えられますが、近世のこの地域は寺請制度のもとで正法寺・光源寺・水月寺に宗門統制されており、宗門改めも厳しく実施されていたようです。さらに、この一帯は17世紀後半から19世紀末にかけて近世の墓地となっていることから、禁教令以後に製作・使用された可能性は低いと考えられます。

これらのことから、「土製聖人像」は、“16世紀末葉から17世紀初頭まで”の間に製作された、あるいは持ち込まれたとみられます。

「土製聖人像」は、中世日向におけるキリスト教受容の実態を解くとても重要な遺物で、中世の土製品としては、日本国内の初例となります。ただ、本来の形状や製作技法、入手経路等についてはまだ不明な点は数多くあります。

合同企画展「豊と日向～日出る国の考古学～」では、「土製聖人像」と「ヴェロニカのメダイ」が双方のキリシタン遺物として並べて展示してあります。ぜひ、当時の豊と日向との関わりに思いを馳せながらご覧ください。

田中敏雄



【土製品表面及び断面】